

## 北海道内博物館合同展示

### 「押し花の押し花～牧野富太郎と植物標本」の報告

加藤ゆき恵・首藤光太郎・城坂（平林）結実・水島未記・持田 誠・山崎真実

Key Words 牧野富太郎 (MAKINO Tomitaro)、植物標本 (Herbarium specimen)、合同展示 (Joint exhibitions)、博物館の連携 (Collaboration among museums)

#### 1 はじめに

2023年（令和5年）4月～9月に放送されたNHK連続テレビ小説「らんまん」は、植物学者の牧野富太郎（1892～1975）が主人公・榎野万太郎のモデルであった。牧野はそのユニークな人柄からもともと人気のある人物であったが、ドラマ放送開始が近づくにつれ関連書籍が多数出版され、さまざまな雑誌でも牧野特集が組まれるなど、ドラマの人気も相まって「牧野ブーム」「植物ブーム」と言っても過言ではない状況となった。

筆者らが所属する北海道内の6つの博物館で、2023年の初夏から秋にかけてこのドラマにちなんだ合同展示を開催した。本稿では、この事業を企画した経緯および開催の実態、その成果などについて報告する。このことにより、今後の博物館の展示活動や複数館の連携のあり方についての参考となることを期待するものである。

#### 2 開催までの経緯

筆者のうち加藤は「らんまん」の放送が決定された時点（2022年2月記者発表、<https://www6.nhk.or.jp/nhkpr/post/original.html?i=33025>）でドラマ放送と時期を合わせた展示開催を目論み、2023年4月から収蔵資料ミニ展示を釧路市立博物館で開催した。ミニ展示の準備と平行して、「熱すぎる植物愛」「生涯で約55000点の植物標本を採集（標本点数は田中（2023）による）」といった牧野富太郎のエピソードから「押し花の押し花」（以下、「押し花展」）という展示を思いつき、北海道内植物系学芸員のメーリングリストで参加を呼びかけた。年度末、2023年3月31日のことであった。

この「押し花展」は、牧野富太郎の植物愛にちなみ、

賛同する博物館で、それぞれ植物担当学芸職員が「特に気に入っていて人に見せたい植物」（この企画ではこれを「押し花」と呼んだ）を、腊葉標本（押し花）の実物と、「押しポイント」を簡潔にまとめたコメントとともに紹介するという趣旨の小規模な展示である。各館の空きスペース等を活用して、それぞれの館で同時に、もしくは時期をずらして五月雨式に開催するという形式をイメージしていた。この企画の開催により、以下のような効果が期待された。

- ・装飾品としての「押し花」ではない、学術的な植物標本（腊葉標本）を紹介し、その重要性を知ってもらう機会となること（展示タイトルは語呂を合わせて「押し花」を用いた）
- ・北海道内の植物担当の学芸員・研究者（以下、植物担当学芸職員）がいる博物館が共同で事業を行うことで、植物担当学芸職員の存在を示す機会となること
- ・各館で自館の「押し花」を展示するだけでなく、合同展として他館の展示についても場所や会期を紹介する、あるいはスペース等の条件が許せば全館分の「押し花」を展示するなどの手法で、複数館の周遊を促す効果が期待できること

統一したロゴとタイトル、共通のフォーマットを使うことで、視覚的な面でも合同展としての統一感を図った。また、展示終了後の展望として、展示内容をまとめた一般市民向けの印刷物を作成することで、より一層の普及を図ることも目指した。

加藤の呼びかけに対し、5館の植物担当学芸職員から賛同の回答があった。また、異動により現在は博物館勤務ではないメーリングリストメンバーからも参加の意があったが、展示会場の折り合いがつかず、今回は見送ることになった。

加藤ゆき恵：釧路市立博物館

首藤光太郎：北海道大学総合博物館

城坂（平林）結実：美幌博物館

水島未記：北海道博物館 研究部 自然研究グループ

持田 誠：浦幌町立博物館

山崎真実：札幌市博物館活動センター

## 牧野富太郎の生涯をざっくりと紹介

注：「9人9草」の多かれを食む可能性があります！

### とにかく植物が好き「植物オタク」

牧野富太郎という、たくさんの植物を採集して顕微鏡で写真に写る姿を思い浮かべる方も多いことでしょう。トレードマークとも言える野外での服スタイル等は、「庶人」である植物に会いに行くに支障のないように正装をしていたのです。牧野富太郎は著作の中でも、植物に対する愛や多岐にわたる愛情を表現しています。

私は植物の愛人としてこの世に生まれて来たように感じます。あるいは草木の種かもしんと自分で自分を疑います。

植物が好きであるために花を見る事が何より楽しみてあって寂く事知らない。まことに合わせては合せても事だ。花に對すれば常に心酔してかつ真なる心を通ずる。

私の一生は殆ど植物に奉じている。すなわち植物が有る生命が有る所までである。ようこそおはこれの真に富んだ植物界に生まれ植物が好きであったことを神に謝すべしと心得ている。私も植物が好きならなかったら、今ごろはもうと体が衰え手足がふるえて、心ももうろくしているに違いないから。幸いに植物が好きであったために、この九十二歳になっても、美言ばつづく、社会としての責がある。

草を採に本の紙を比べ、花を忘れた五十年(五十年といえども、この意はまだ疑いのない)

いずれも『牧野富太郎自叙伝』より



---

### 日本の植物分類学の発展に貢献

明治期以前は海外の研究者が日本の植物を自国に持ち帰り、新種記載されていました。明治に入り、東京大学を拠点に日本人による植物分類学の研究が行われるようになりました。牧野が最大に出入りしたものはちょうどその時期にあたり、市川(田中) 辰次郎、森谷豊五郎とともに学術雑誌『植物学雑誌』を1897年(明治30年)に創刊し論文を発表するなど、日本における植物分類学の発展に貢献しました。

明治から大正期に入ると植物学、解剖学、植物学などの分野が発展し、これらの分野の論文が『植物学雑誌』に掲載されるようになりました。植物分類学の論文を掲載する学術雑誌が必要だと考えた牧野は1916年(大正5年)に『植物研究雑誌』を創刊しました。どちらの雑誌も現在まで発行され続けています(植物学雑誌は『Journal of Plant Research』に名称変更)。

牧野富太郎はその生涯で約1400の植物の学名を発表し、日本語の植物につけた学名の数は日本人の分類学者の中で牧野が最多です(田中2023)。

私は思うに、『植物学雑誌』は武士(さむらい)であり、『植物研究雑誌』の方は町人であったと思う。というわけは『植物学雑誌』の方は文章も漢文体で、種名も漢字で、『植物研究雑誌』の方は文章も漢文体で、種名も漢字であった。

私は自分で自由に出来る機関誌があれば不便なので、大正五年四月『植物研究雑誌』を創刊した。(中略) この雑誌は、いわば私の遺産であった。

いずれも『牧野富太郎自叙伝』より



『植物研究雑誌』創刊号

### 因風を作ることが目標。植物商がすごい。

明治期の日本には、日本産の植物を採集した因風や植物目録が多く、『日本植物志』を出版することが牧野の目標でした。「因の方が文章よりも早わかりが良かった」と思ったため、解説よりも先に因風を出版したと振り返っています(『牧野富太郎自叙伝』)。

牧野は植物商にも非常にこだわりのあり、1931年(昭和6年)発行の『植物研究雑誌』で「植物商への希望(買手側から買手側)」という文章を寄せています。また、のちの『牧野因風』の出版後にも改訂版発行のために手紙を人々へ送りました。

牧野が採った植物は、その美しさから本の装幀や挿し絵、紙質などに使われることもあります。

日本にどうしても日本植物研究の土台となるべき完全な日本植物志が必要である。この仕事の実行には自分は最悪の者である一人であると自負している。幸いに私はこの仕事を遂行するに十分な健康を持っている。『牧野富太郎自叙伝』

自分でいうのも変だが、私は別に誰かを驚かす事を買ったわけではないが、生涯の中心が『牧野富太郎自叙伝』

植物学においては、因は極めて必要且つ重要なものである。因ほど解りやすいものはないが、文章に優る因の価値がある。『植物学者への希望(買手側から買手側)』(田中辰次郎等編)

## 牧野富太郎と植物標本

### 植物の記録を残す「植物標本」

牧野富太郎は全国各地を訪れ、植物を採集しました。採集した植物は押し紙を作るのと同じように新聞紙にはさんで乾燥させ、標本にします。乾燥させた標本を「植物標本」と呼びます。

真夏の押し紙と違って、草であれば根元から全体を、木であれば葉や果実と一緒に採集するように、つまり植物全体の形がわかるように採集することが大切です。乾燥させた標本はA3サイズくらいの台紙に固定し、植物名、採集地・採集日などを記した標本ラベルを台紙に貼り付け、保管します。

植物標本の作り方、保管方法は基本的に牧野富太郎の時代から基本的には変わっていません。乾燥方法は、手押しで乾燥紙を交換する方法から、ふん乾燥機などの機械を使うようになったりなど、少し手間はかからなくなりました。



採集した植物を標本にするところ

### 釧路市立博物館学芸員 加藤の「推し花」

## ミヤマニガウリ

(くり科)  
*Schizopepon bryoniifolius* Maxim.



花は自立たず  
実は  
ゆらゆらと  
ぶら下がる

学生だったころ、湿度調査の手伝いで釧路に来た時に、細い果柄でぶら下がるミヤマニガウリを見たことが強く印象に残りました。

10年後、嫁あって釧路に来ることになり、博物館の周りの春採公園にミヤマニガウリがたくさん生えているのを見つけました。花が咲き終わると果柄を長く伸ばします。1年草なので秋まで花が咲き続け、ぶら下がる果実もずっと見られます。

図1 牧野富太郎紹介パネル(全館共通)

図2 「推し花」紹介パネルのフォーマット

参加メンバーが確定した後は、開催方法や展示内容についてメールで意見交換しながら具体的に決めていった。

### 3 合同展示の概要

#### (1) 展示内容

牧野富太郎についての紹介は全館共通として、「牧野富太郎の生涯をざっくりと紹介」と「牧野富太郎と植物標本」の合計3枚のパネルを使用した(図1)。内容は「押し花展」の前に釧路で開催したミニ展示「牧野富太郎とメアカンキンバイ」の内容をベースにして作成した。

#### (2) 押し花

参加メンバーがそれぞれ1点以上「押し花」を選び、フォーマットに沿って押しコメントを作成した。腊葉標本(押し花)では植物の立体的な形が分かりづらいため、紹介パネルの中に生態写真を入れた(図2)。

押し花の展示点数は会場ごとに異なり、1点のみのところから全員分の押し花を展示したところまでさまざまだった。参加メンバーごとの押し花は表1の通り。

### 4 各館の展示

各館の展示内容と担当者のふり返りを開催順に紹介する。なお、アンケート等で感想を集めることをしなかったため、来場者の反応は直接の対話や、動向を観察できた範囲で記す。

#### (1) 北海道博物館(担当:水島未記)

会期

2023年6月1日～9月29日

会場

総合展示室2階交流ゾーン(要総合展示観覧料)

#### 展示の形態

総合展示(常設展)内の多目的空間「交流ゾーン」において、独立したミニ展示として開催した(図3)。構成としてはガラスケース1台とA3判のパネル4点のみとした。当初は夏期の特別展に関連してこのスペースを使用する可能性があったため終了日は決めずにスタートしたが、結果として特別展では使わなかったため、このスペースの次の使用日前日の9月29日まで展示を継続できた。



図3 北海道博物館の展示のようす

#### 展示標本

ガラスケースは標本が3点入るサイズだったため、一推しのヒメニラ(ヒガンバナ科)に加えてヒメザゼンソウ(サトイモ科)、オニノヤガラ(ラン科)の2点も展示した。

#### 独自の取り組み・工夫

館の研究プロジェクト「野幌森林公園の生物インベントリ調査」の一環で植物相も調査しており、本展示ではその成果の公開も兼ねて、調査で採集した標本を用いた。

表1 参加メンバーごとの「押し花」

参加メンバー	押し花
加藤(釧路市立博物館)	ミヤマニガウリ(ウリ科)
首藤(北海道大学総合博物館)	ゴハリマツモ(マツモ科)
城坂(美幌博物館)	ハイキジムシロ(バラ科)
水島(北海道博物館)	ヒメニラ(ヒガンバナ科) ヒメザゼンソウ(サトイモ科) オニノヤガラ(ラン科)
持田(浦幌町立博物館)	エゾネコノメソウ(ユキノシタ科) ハマハナヤスリ・ヒメハナワラビ(ハナヤスリ科)
山崎(札幌市博物館活動センター)	クロヌマハリイ(カヤツリグサ科)

6館の中で最もスタートが早かったため、全館共通のパネル（加藤作製、図1）以外に、「推し花展」全体の趣旨を説明した「イントロパネル」と、他館への誘導を目的とした6館すべての基本情報（館名、所在地、電話番号、ウェブサイトURL）および「推し花展」の会期、「推し人」（担当者）氏名、二次元コード（「推し花展」のページがある場合にはそのページ、ない場合には館のトップページのURL）を掲載した「参加館紹介パネル」の2点を作製した。開始当初は会期などが未定の館もあったので、参加館紹介パネルについては新たな情報が確定する都度更新するなど、柔軟な運用を行った。これらのパネルのグラフィックデータは参加館で共有し、他館での開催時にも活用された。

また、展示開始後に合同展示告知のためのウェブページを公開し、そこでも他の5館についての基本情報および「推し人」の氏名を紹介し、各館のウェブページへのリンクを張った。

#### 来場者の反応

会期を通じた来場者の反応はリサーチしていないが、交流ゾーンは総合展示入場者の大多数が通る導線上に位置するため、多くの来場者の目に触れたものと思われる。元々このコーナーの壁面には全学芸・研究職員と解説員を紹介した「スタッフ紹介」パネルがあり、日頃から足を止めてこのパネルを見る人が比較的多い。「推し花展」はその手前の空間を使ったため、自然と目に入ることが多かったと推測される。

#### 開催してよかったこと・反省点

総合展示の構成上、常設の展示物としては腊葉標本がまったくないため、腊葉標本を展示できる数少ない機会として貴重であった。また、植物担当学芸職員が北海道内でも多数いるということを知っていただくいい機会となったと考える。

パネルが小さくタイトルが目立たなかったため、趣旨説明のパネルとは独立した形でタイトルとロゴマークを大きく表示したパネルを設置するなど、より目を惹く工夫をすればさらに観る人が増えたであろうということは反省点である。

### (2) 美幌博物館（担当：城坂（平林）結実）

#### 会期

2023年7月1日～10月9日

#### 会場

2階ロビー（入場無料エリア）

#### 展示の形態

外来種ハイキジムシロの腊葉標本を、厚みのあるアクリルフレームに入れ、担当者の推し理由とともに自立パネルに展示した。その他、高知県立牧野植物園からデー

タ借用した、エビネ、コウシンソウ、ジョウロウホトトギス、ムジナモ、ヤッコソウの計5点の細密画と牧野富太郎の肖像写真1点を展示した（図4）。細密画と肖像写真は、ドラマ放送で頻繁に使われていることから、視聴者の興味を惹きつけられるよう展示することとした。展示開始後に、NHK北見放送局へ申し入れ、「らんまん」のポスターとハガキサイズのリーフレットを展示した。こちらは、放送終了まで（9月30日）の期間限定展示となった。



図4 美幌博物館の展示のようす



図5 美幌博物館ロビー展「すごい標本!すごい資料!」のチラシ



図6 美幌博物館の展示（ハイキジムシロ標本と採集時のエピソード紹介パネル）

### 展示標本

ハイキジムシロ（バラ科）

### 独自の取り組み・工夫

毎年7～10月に開催している、美幌博物館ロビー展「すごい標本！すごい資料！」の一部として開催した。本ロビー展は、特別展の会期中に合わせて開催されるため、来場者増の相乗効果を見込むことができる。また、博物館事業として開催することで、チラシ5000枚を町内の小・中学生全員や近隣の市町村に配布することができ、広報に力を入れることができた（図5）。

また、ドラマ放送で使用された植物レプリカを製作している株式会社 西尾製作所は、当館常設展示室のジオラマも手がけている。そのため、レプリカができるまでを解説パネルで紹介し、常設展示室への導線とした。

### 来場者の反応

推しコメントとして、美幌峠の階段で転倒して流血するという、ショッキングな内容を挙げたからか、「傷は治りましたか？」「私も転んだことがある」「流血した人ですよ」など、展示期間中は、来場者から気軽に声

をかけてもらうことができた。植物は動かない生き物のため、固い印象を持たれがちな側面もあるが、本展示の推し理由によって、植物に親しみを感じてもらえたのではないと思う（図6）。

また、来場者が自由に持ち帰ることができるように設置していた、ドラマのリーフレットと、6館の館名と展示期間などを記載した用紙は、来場者がよく手に取っていた。ドラマへの興味関心を、6館への周知へつなげられたのではないだろうか。

### 開催してよかったこと・反省点

2022年に道東で初めて美幌峠で自生が確認された外来種、ハイキジムシロのお披露目をするができるよい機会となった。また、6館の植物担当学芸員が連絡を取り合う中で、各館の事情や各地域の様子を知ることができ、来場者のニーズも異なることへの理解が深まった。

自然光が差し込む展示会場で長期間同じ標本を展示していたため、腊葉標本の色落ちが激しかったことが反省点である。1ヶ月程度で標本の差し替えをするなど、配慮が必要だった。

### (3) 浦幌町立博物館（担当：持田 誠）

#### 会期

2023年7月8日～10月1日（当初予定の9月3日から延長）

#### 会場

常設展示室内〈入館無料〉

#### 展示の形態

常設展示室内に、2023年度に新調したガラスケース2台、展示ボード1枚、および展示机2台を使用して展示した（図7）。ガラスケース内にはLED照明を配し、腊葉標本を設置した。UVカットアクリル板を所蔵していないため、標本は剥き出しの状態での展示となった。このため、標本保存のために約1ヶ月間で展示の入替を実施した。当初は期間中2回入れ替えを行うことを計画して



図7 浦幌町立博物館の展示のようす（左：前半、右：後半）

いたが、最終的に1回の交換に留めた。展示ボードに全館共通の牧野富太郎の解説文と「推し花展」の紹介を掲示したほか、エゾネコノメソウは同年春に浦幌町内での自生を確認（十勝地方での初記録）したため、報道された新聞記事と自生地の様子についての写真を掲出した。また、ハマハナヤスリは現在十勝地方で自生地が1か所しかなく保全対策が実施されている。このきっかけは、同じ豊北海岸に自生するヒメハナワラビが、10年間当該地域からの記録が無く地域内絶滅が心配される状態にあることが明らかになったことであった。このことから、両種の標本を並べて展示し、絶滅危惧植物の現状について解説した。

#### 展示標本

エゾネコノメソウ（ユキノシタ科／7月8日～8月15日）

ハマハナヤスリ・ヒメハナワラビ（ハナヤスリ科／8月16日～10月1日）

#### 独自の取り組み・工夫

8月16日からの後半展示に合わせて、NHK帯広放送局からの依頼で「らんまん」の番組宣伝パネルを展示した。これは、8月15日の終戦記念日に際して展示した「戦争柄の着物」の取材に来た同局スタッフが「推し花展」を見て発案したものである。いったん局へ持ち帰って相談ののち、「ぜひ番組パネルを置かせて欲しい」との依頼があり、イーゼルに載せたA0判の大判パネル合計8点を、「推し花展」を取り囲むように配置した（図7の右）。また、「らんまん」のリーフレット、NHKの番組配信サービス「NHKプラス」の宣伝用リーフレットなどの配置も実施した。

このため、後半の展示は事実上「推し花展」と「らんまん」のパネル展の両方をセットにした展示構成となり、来場者の関心を高めた。

また、名前のわからない植物の同定依頼や、標本の作り方を知りたいという問い合わせも、例年より多く寄せられた。

なお、2023年9月号の『浦幌町立博物館だより』、広報うらほろ9月号に掲載のコラム欄「博物館の窓」で、「推し花展」を採り上げた。

#### 来場者の反応

来場者からは、植物採集と標本づくりに関する意義をようやく理解できたとの反応が複数みられた。浦幌町立博物館では、日常的に胴乱と野冊を担いでの植物採集を学芸員が実施している。2015年に当館へ着任以後、胴乱を担いで斜面を登っている姿を見かけた町民から「あれは何者か？」「何をしているのか？」といった問い合わせが寄せられることがあったが、今回の展示で標本採集に関する情報が広く普及したことにより、当時の町民から「あれはこういう事だったんですね」との声をいた

だいた。

また、ドラマを視聴している方の来館が多く、実際の牧野富太郎と「らんまん」での槇野万太郎の共通点と違いに関する質問が多く寄せられた。また、「植物学者にとって、牧野富太郎はいまも憧れの存在ですか？」という質問も複数寄せられた。

当館はもともと考古学が主体の博物館であるため、本展を見て初めて植物の標本を収蔵していることを知った人や、学芸員の専門分野が実は植物であることを初めて知った人もいた。また、歴史系の地域博物館と思って来場した方のなかには、自然史分野の収集について知ったことで、「博物館ってなんでも集めるんですね」といった、理解を深めたというよりも半ば呆れたような反応もあった。

#### 開催してよかったこと・反省点

開催してよかったことは、植物標本収集の意義について、広く普及できたことである。これについては、明らかに「らんまん」の放送と絡んだ意義が大きい。当館では、2015年に学芸員が着任して以後、たびたび植物に関する講座や腊葉標本の展示を実施しているが、わずか半年間のドラマの影響力は、こうした博物館事業とは比べものにならないほど大きいことを知った。このことは逆に、従来の細々とした企画展や解説記事の執筆が、いかに人々に伝わっていないかということを痛感するきっかけともなった。もともと自然史に無関心な層に何かを訴えるには、従来から博物館関係者が考える方法では限界があることを、今回の展示であらためて浮き彫りにされた感がある。

反省点としては、展示後半でNHK帯広放送局からの依頼により番組パネル展を開催したにも関わらず、ついに一度もニュース報道がされなかったことである。これについては、パネル展受入時に担当者を通じて口頭で全館共通の取り組みなので全道版での報道をとお願いしたが、もともと連続テレビ小説の広報については地方放送局には権限がなく、事前にかなり緻密な調整が必要らしいこともわかった。やはり展示の広報をより効果的にするためには、NHKと正式に共催もしくは後援という形をとることが必要であり、今後同様の展示を実施する際には留意が必要に思う。

ただし、報道はされなかったとしても、番組パネル展を開催したことで、来場者は牧野富太郎や腊葉標本を番組と結び付けて観覧し、それらへの理解をしやすい側面があったことは、効果として疑う予知がない。また、来場者のなかには番組パネル展を見に展示室内へ足を運び、それがきっかけで「推し花展」を観覧した方もいた。このため、両者を併せて展示できたことは、当館にとっては良かったと感じている。

#### (4) 釧路市立博物館（担当：加藤ゆき恵）

会期

2023年7月8日～10月15日

会場

常設展示室1階〈要常設展示室入場料〉

展示の形態

収蔵資料ミニ展示の枠で開催し、ガラスケース1台、展示ボード1枚を使用した（図8）。ガラスケース内にUVカットアクリル板にはさんだミヤマニガウリの腊葉標本を展示し、展示ボードに高知県立牧野植物園からデータを借用した牧野富太郎の肖像写真（大量の植物標本に囲まれている写真）、牧野の解説文と推し花展の紹介パネルを掲示した。また、コルクボードに「推し花展」の前に開催したミニ展示「牧野富太郎とメアカンキンバイ」でも使用した「牧野富太郎ゆかりの地紹介」「牧野を知るためのブックガイド」のパネルを展示した。会期中にNHK釧路放送局から「らんまん」のポスターとリーフレットを提供していただき、展示場所の近くにある壁にポスターを掲示した（「らんまん」の放送終了日まで）。

展示標本

ミヤマニガウリ（ウリ科）

独自の取り組み・工夫

解説文の文章量が多く、文字が小さくなってしまったことと、牧野富太郎の経歴を読むと「らんまん」のネタバレになってしまうため、参加館紹介パネルと合わせて配付資料を作成し、持ち帰って後から読んでもらえるようにした。

来場者の反応

ミニ展示「牧野富太郎とメアカンキンバイ」と併せた反応になるが、新聞や市広報紙等のイベント案内を見て「『らんまん』の展示はどこですか？」と受付で尋ねら



図8 釧路市立博物館の展示のようす

「らんまん」ポスターは会期中途から放送終了まで掲示した。

れることが多く、ドラマをきっかけに関心を持って来館する層がいることがわかった。牧野の紹介パネルをじっくり読んでいる来場者の姿も見られた。

開催してよかったこと・反省点

直接の反応は収集していないが、先にも書いたように本展示を目当てに来館したと思われる人たちがいたことはとても良かったと思う。腊葉標本の重要性について、展示の中で伝えることができなかったため、今後も機会を見つけて紹介していきたい。当初は展示標本を会期中に1～2回入れ替える予定であったが、大型企画展関連の業務等に追われて、一度も交換出来なかった。ミヤマニガウリは良く見られる普通種ではあるが、標本管理という点からは、せめて同一種の別の標本に交換するなどすべきであった。展示スペースが限られたことから、他館の情報を二次元コード付きの一覧表でしか示せなかった（展示及び配付資料）。

#### (5) 札幌市博物館活動センター（担当：山崎真実）

会期

2023年7月21日～10月7日（当初予定の9月2日から延長）

会場

1階廊下〈入館無料〉

展示の形態

腊葉標本用額6枚、展示ボード3枚を使用（図9）。

展示標本

エゾネコノメソウ（ユキノシタ科）、クロヌマハリイ（カヤツリグサ科）、ゴハリマツモ（マツモ科）、ハイキジムシロ（バラ科）、ヒメニラ（ヒガンバナ科）、ミヤマニガウリ（ウリ科）の6種。全参加館の植物担当学芸職員の「推し花」を、同センター収蔵標本を用いて展示（ハイキジムシロのみ収蔵が無く、美幌博物館から提供された標本スキャン画像を利用）。



図9 札幌市博物館活動センターの展示のようす

標本を押し原寸大パネルが目を惹く。

独自の取り組み・工夫

合同展示のメリットとして、札幌から遠い館の存在や学芸員の標本収集の活動を知ってもらうことと考へ、「推しコメント」の統一フォーマットをアレンジし、各館の名称と各植物担当学芸職員のフルネームを大きく表記する独自のレイアウトにした。さらに、それぞれの似顔絵・アイコン画像や館のロゴマークやマスコットキャラクターも入れることで、各館のイメージや各植物担当学芸職員の人柄が伝わることで親しみを持ってもらうことや、目を惹くパネルになるように工夫した。

また、図書コーナーに連続する廊下沿いに設置したことから、コンセプトのある展示になっていることが一目で分かる境界として、「はじめに」パネルの下に学芸員のほぼ等身大の写真パネルを床置きした(図9左下)。写真は野外調査中に採集した植物を新聞紙に挟んで標本を作っているシーンを選び、普段は見えない博物館の仕事の様子が垣間見えるようにした。

今回の展示を設置した廊下の反対側には、既存の水槽で水草など水中の生物を見せており、8月後半に「推し活」として野外で採集したゴハリマツモとマツモの生体も併せて展示した。

来場者の反応

牧野富太郎に関するパネルを熟読している来場者の年齢層は中高年が多かった。30代以下やファミリー層は標本を眺めながら立ち止まる人が多かった。各博物館については「子供の頃に美幌に住んでいて博物館に行ったことを思い出した」「浦幌に行ったことがあるけれど、博物館があったとは知らなかった」という会話を耳にしたことから、植物のみではなく各館への関心も少しでも触発することができたかと思う。

開催してよかったこと・反省点

広報は公式ウェブサイトへの掲載のみであったが、展示期間が当センター独自の企画展「たんぼぼっぽい植物」展と重複したことで、企画展の告知により植物に興味関心のある人には届いたかと思う。企画展の関連事業で行った「タンポポの標本をつくろう」も幅広い年齢層に好評で、「ドラマで見た標本作りを体験できてよかった」という声もあり、企画展との相乗効果もあった。

また、図書コーナーの一角に牧野富太郎関連書籍(図鑑、植物画集を含む)を設置したところ、少数ではあるが1~2時間かけて読んでいる来館者もおり、滞留時間が長くなる傾向が見られた。これまで全く植物や標本に興味が無かったがドラマにより、牧野富太郎という人物のみならず、そこから派生して植物分類学や標本にまで興味が広がったという人も多く、メディアの力が人々の心を動かす・行動を変えることを実感することができた。

(6) 北海道大学総合博物館 (担当: 首藤光太郎)

会期

2023年7月27日~12月24日(当初予定の10月31日から延長)

会場

常設展示3階「生物標本の世界」〈入館無料〉

展示の形態

常設展示室の空きスペースの一部に展示ケース1台を配置し、ケースの上部にA3判パネル3枚、ケース内に腊葉標本2点、A3判パネル2枚、標本のキャプション2枚を展示した(図10)。A3判パネルはいずれも全館共通のものである。会期は7月末から10月末としたが、教員が自由に更新を行うことができる常設展示内のスペースを利用したため次の使用予定を考慮する必要がなく、結果的に12月24日まで展示を継続した。

展示標本

担当者の「推し花」である茨戸川産のゴハリマツモ(マツモ科)と、牧野富太郎が採集した標本を計2点展示した。前者は同種の北海道新産を報告した際の証拠標本であり(首藤ほか 2023)、後者は1923年10月28日に東京都小岩で採集されたユウガギク(キク科)である。

独自の取り組み・工夫

今回の合同展示のきっかけとなった、牧野富太郎が採集した腊葉標本を利用した。北海道大学総合博物館陸上植物標本庫(SAPS)にわずかに収蔵されている牧野採集標本の中からユウガギクを選定した理由は、採集者が牧野本人であることが明示されており、かつ美しく作成されていたためである。

見た目のよい牧野標本を展示することができたため、推し花としては、よりマニアックな種を選定した。ゴハリマツモは結実した状態でのみ狭義マツモと識別が可能であり、展示した標本も結実期のものである。厳密には「推し花」ではないため、キャプション上の「花」の文



図10 北海道大学総合博物館の展示のようす

字の上に二重線を引き、横に「実」の文字をつけ足すこととした。

#### 来場者の反応

特に来場者の反応は調べていない。「らんまん」の放送期間中は、多くの来場者が立ち止まって展示を見ていたことを、受付スタッフが日常的に確認していたようである。

#### 開催してよかったこと・反省点

まずは、道内の植物担当学芸職員で連携して1つの企画を実施できたことが大きな成果であると考えられる。同様の企画を定期的に行っていくことで、道内に点在する博物館等施設を効率的にアピールしていくことができると思われる。また、場合によっては館あたりの1企画における担当者の負担を減らすことにも繋がるかもしれない。

一方で、総合博物館の展示としては、初歩的な計測ミスから展示できなかつた資料（論文の別刷りやユウガギクの写真など）があった、このことが原因でゴハリマツモの解説に十分なフォローができなかつた、準備が遅く会期が遅くなってしまったことなど、反省点が多い。

## 5 おわりに

「らんまん」の放送期間中を中心に、2023年は国内各地の博物館施設で牧野富太郎に関する展示やイベントが行われた。牧野にゆかりのある博物館・植物園等は、牧野採集標本や牧野直筆の手紙などを展示し、牧野富太郎と同時代に活躍した植物研究者・研究者がいる地域では牧野との関わりを導入として人物や植物学について紹介していた。「押し花展」は牧野採集の標本や手紙など牧野と直接的な関わりのあるものは紹介していないが（北海道大学総合博物館は除く）、「らんまん」を入口として植物学に興味を持ち始めた人に、気軽に楽しんでもらえるものになったのではないかと考える。その意味で、当初に期待された効果のうち、学術的な植物標本の存在やその重要性を伝えるという点に関しては、どの参加館においても一定の成功を得たと言えるだろう。

くわえて、6館共同での企画の実現によって、道内各地に博物館があり植物担当学芸職員がいることを知ってもらうきっかけにもなったと考えられる。

一方で、この展示を通して「他の館にも行ってみよう」と思った来場者がどれだけいたか、すなわち、当初に期待された効果の1つである「複数館の周遊」にどれだけ結びついたかは不明である。特に浦幌・釧路・美幌は近隣館でも距離が遠いため実際にそれを実行するのは困難だったことが推測される。

反省点としては、第一に、ひとりの思いつきから始まり、提案から展示開始までの期間が短かったことから、準備や意見交換に時間をかけられなかつたことが挙げられる。前章の浦幌町立博物館の反省点で詳述したように、早くから準備を進めていれば、NHKと連携するなど、より広範囲な周知広報につなげることができたと考えられることは惜まれる。また、植物系に限らず、広く自然史系学芸職員に呼びかければ参加館が増えた可能性もあるが、準備期間の短さから今回は6館という規模が適切だったと判断している。

来場者の感想や展示の効果について検証することを想定していなかつたため、直接交流できた来場者の反応しか見ることができなかつたことも反省点である。今後同様な展示の機会があれば、二次元コードから回答するGoogleフォームのアンケートを作成するなど、来場者の声を集める手段を検討したい。

「押し花展」からは離れるが、「らんまん」の中で植物分類学や植物標本（腊葉標本）について丁寧に解説されたことから、博物館での教育普及活動や資料調査で訪れた先などで「『らんまん』のあのシーンの……」と言うだけで話が的確に伝わるなど、ドラマによる普及効果を実感することが多くあった。「牧野富太郎の展示」というテーマに惹かれて博物館を訪れた人も少なからずいた。「らんまん」をきっかけに植物学に興味を持った人の「植物についてもっと知りたい」という気持ちが薄れないうちに、関心をつなぎ止められるような取り組みを行っていきたい。

#### 引用文献

- 首藤光太郎・山崎真実・佐久間春子・富士田裕子 2023. 北海道新産のゴハリマツモ（マツモ科）と道内におけるマツモ属の極めて稀な結実記録. 植物地理・分類研究 71: 65-71.
- 田中伸幸 2023. 牧野富太郎の植物学（NHK出版新書696）. NHK出版.

## Report on Joint Exhibitions Held at Six Museums in Hokkaido, “Oshibana no Oshibana: Dr. MAKINO Tomitaro and Herbarium Specimens”

KATO Yukie, SHUTOH Kohtaroh, SHIROSAKA (HIRABAYASHI) Yuimi, MIZUSHIMA Miki, MOCHIDA Makoto and YAMAZAKI Mami

---

Dr. MAKINO Tomitaro (1892-1975) is a preeminent Japanese plant taxonomist. His life story is recounted in the NHK television drama *Ranman*, which aired from April to September 2023. Through collaboration between the six museums where the co-authors of this paper work, we conducted joint exhibitions pertaining to *Ranman* and Dr. Makino. In this paper, we report on the exhibition project, which was jointly held from June to December 2023.

This project was held with greatest respect for Dr. MAKINO, a true lover of plants who collected about 55,000 herbarium specimens in his life. The co-authors, who are curators and researchers of botany in six museums throughout Hokkaido, each selected a plant species as *oshibana*, and exhibited its herbarium specimen together with their commentary. The phrase *oshibana* which was invented for this project means “recommended flower” in Chinese characters and is homophonic to “pressed flower” in Japanese. The purposes of this project are: 1) introducing herbarium specimens, which are different from artistic pressed flowers, to the public, and creating awareness of the importance of herbaria; 2) creating opportunities to recognize curators and researchers of botany in

Hokkaido; and 3) encouraging people to visit the other participating museums. We used the same panels to introduce the life and works of Dr. MAKINO, and the same format to provide commentary about *oshibana*. Each museum introduced the other participating museums.

The periods of exhibition in each museum were: Hokkaido Museum (Sapporo City) June 1 - September 29, Bihoro Museum (Bihoro Town) July 1 - October 9, Historical Museum of Urahoro (Urahoro Town) July 8 - October 1, Kushiro City Museum (Kushiro City) July 8 - October 15, Sapporo Museum Activity Center (Sapporo City) July 27 - October 7, and The Hokkaido University Museum (Sapporo City) July 27 - Dec 24.

In 2023, many museums throughout Japan held exhibitions and events about Dr. MAKINO. Our exhibitions did not exhibit items such as letters written by Dr. MAKINO's own hand or his personally collected specimens except at The Hokkaido University Museum, but this project created opportunities to share knowledge about plant taxonomy for people who became interested in botany from watching *Ranman*.

---

KATO Yukie : Kushiro City Museum

SHUTOH Kohtaroh : The Hokkaido University Museum

SHIROSAKA (HIRABAYASHI) Yuimi : Bihoro Museum

MIZUSHIMA Miki : Natural History Group, Research Division, Hokkaido Museum

MOCHIDA Makoto : Historical Museum of Urahoro

YAMAZAKI Mami : Sapporo Museum Activity Center

---